Special Interview : Senju Hiroshi

千住博 特別インタビュー

次代を担う表現者へ

「人間」同士の相互理解 その先に

長く西洋に身を置きながら、あらゆる文化・芸術へと真摯な眼差しを注ぎ、常に日本の絵画に対して強くしなやかな思索をめぐらせ深め続けてきた世界的日本画家・千住博。本紙最終号を飾る特別独占インタビューでは、現在軽井沢千住博美術館にて初披露されている新作《御厨人窟》の制作秘話から、次世代を担う表現者たちへのメッセージまで、広く、深く、語っていただいた。

――現在軽井沢千住博美術館では10年前断念した御厨人窟に改めて挑戦した新作が展示中です。

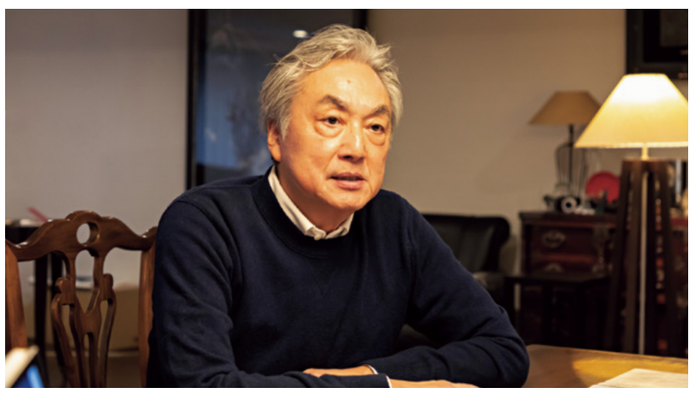
千住 10年前はちょうど高野山開創から1200年の節目の年で、その吉辰の掉尾を飾るべく金剛峯寺から障壁画の依頼を受けたタイミングでもありました。私は弘法大師空海の縁の地を巡る取材地のひとつとして、お大師様が修行し悟りを開いたといわれるこの洞窟を訪ねたのです。空と海しか見えない窖のなか悟りを開いたお大師様が自らを「空海」と名乗るに至った場所。さぞ峻厳な大スペクタルが待ち受けているのだろうと想像しました。しかしいざ対峙してみますと何の変哲もない岩山。何枚かスケッチしながら浅はかな私は「だめだ、これでは絵にならない」とその地を障壁画に描くことを諦めざるをえませんでした。

＊

――10年越しに今改めて挑戦したのは何故でしょう。

千住 金剛峯寺に奉納する障壁画に取り組んでいた5年間、私もまた修行僧に少しでもあやかろうと一日も怠ることなく毎日必ず1万歩歩くことを自らに課しました。一日たりとも欠かさずというのは難儀なもので、変わり映えのない風景に辟易しながら公園を何周も回る毎日。つまらない樹だなと思いながらも何千何万回とその樹を目にするわけですね。そのうちに私は何の変哲もない樹に名前をつけて挨拶するようになりました。ウィリアム、ヘンリー、チャールズ……すると今まで全く絵にならない「つまらない樹だな」と思われていた樹木が全て、ほんの少し視点をずらすだけで美しい表情が現れてくることに気が付いたのです。どんなにつまらないように思われる小石や枯葉でも見方をわずか変えるだけで劇的に変化する。その時私は「絵にならない」という判断は全てこちらの準備不足の問題だったということを学んだのです。

障壁画に取り組んだ5年間は間違いなく私にとっての修行でもあったわけです。歩きながら目に映るもの、自身の興味や視点は日を追うごとに変わっていきました。空をわたる雲を見て季節の移り変わりを感じたり、ひたすら歩き続ける自分の鼓動に耳を澄ましたり、それまでになかった気づきや視点を得る事ができた。その期間を通して自身が変わったという実感がありました。そうして御厨人窟を断念して10年――もしかしたらあの時には自身の準備不足から何も見えてはいなかった御厨人窟を今なら描けるかもしれない、そう思ったのです。



《御厨人窟》2024年 259.1×181.8㎝ 紙本彩色
軽井沢千住博美術館蔵

＊

――奉納後も空海を想い、追いかける時間は続いているわけですね。

千住 その通りです。御厨人窟を再び訪ね、お大師様が厳しい山岳修行を通して身につけたに違いないアニミズム的自然観に触れ、そして空と海しか見えない洞窟の中で、夜になれば満天の五色界道の星々の下、お大師様は自分が宇宙と一体化していることを体得されたのだと思ったのです。私自身本作と向かい合うなかで、この絵はどうなりたがっているのだろうと自分のことのように絵の語る声に耳を傾けながら夢中になって制作を進めました。まさに主客未分の境地でした。自分のエゴがある限り見えるものも見えなくなってしまう。それらを捨て去り、ただただ心を空にして向き合う純粋経験の果てに、全ての情報が出揃うはずだ、そうして出揃ったものを描くことができれば、それは恐らくお大師様がこの崖の洞穴で見たものをわずかでも顕現させてくれるに違いない――。そのように想い馳せながら1200年前の光景を想像してこの作品を描きました。

＊

――別構図の御厨人窟作品も現在制作中とのことですが。

千住 巨大な滝と崖の作品が開館130年の節目を迎える奈良国立博物館で、今春5月26日から永久展示される予定です。既に滝の作品はお納めしました。

《ウォーターフォール・オン・カラーズ》は、滝の内側から見た世界には光や彩が満ちている、というのがそもそものコンセプトとなります。今回私は時空を超えて、当時世界で唯一の100万都市として栄えた長安を見つめ最強の国力を誇った唐の色彩を創り出し強い色相対比によって滝を描きました。正倉院と密接に結びついた奈良国立博物館に展示される作としてこれ以上ない歴史観を踏まえたつもりです。そして現在I30号パネルを横に三つ繋いだ横構図の御厨人窟の作品を描いています。ちょうど同時期には特別展「超国宝―祈りのかがやき―」の後期展示が開催されます。作品を通して東漸文化と歴史の一端を体感していただければ幸いです。

＊

――常に世界／日本を見つめる先生から次代を担う表現者たちへメッセージをお願いします。

千住 自らが拠って立つ、身を置くべき文脈をきちんと理解することが何より大切なことだと思います。歴史や伝統を学ぶと同時に、いかに類例のない仕事をするか。この二つを両輪とし駆動させていくことこそが芸術家に求められるべき精神なのです。もしあなたが日本人であるならば、あなたは自分が西洋人ではないということを改めて意識してください。西洋人ではないのだから西洋美術のその先は作れないのです。世界が日本に望んでいるのは日本発信の日本オリジナルを示すことです。優れた日本文化の次の一ページを作ってほしい。また近年では中国から多くの若い方々が来日し、日本画を学び、意欲溢れる作品を制作されていますが、彼らは単に日本画を描いているわけではありません。中国絵画の拡張された新しい地平を作っているわけです。素晴らしい中国文化の新たな伝統のため良い勉強を続けていただきたい。

古来より日本にはガンダーラやヘレニズムなど多くの美術様式が伝播し根付いてきました。その共生・共存が日本の持つ多様性の源泉であり、これこそが日本文化の本質の一つだと思います。多様性に触れるとき最も大切なことは共通項を探すこと。つまりそれは言うまでもなく「人間である」ということです。人間として物を見、発想し、発表してください。そして同じ人間に伝えてください。これが国際性の内実です。そのとき浮き彫りになる相異を多様性として認め合いリスペクトすることではじめて、この紛争や諍い、不寛容の絶えない世界に生きる私たちは、次の歴史の新たなる希望、すなわち芸術の新たなるページを作ることができるのではないでしょうか。

――本日は貴重なお話をありがとうございました。

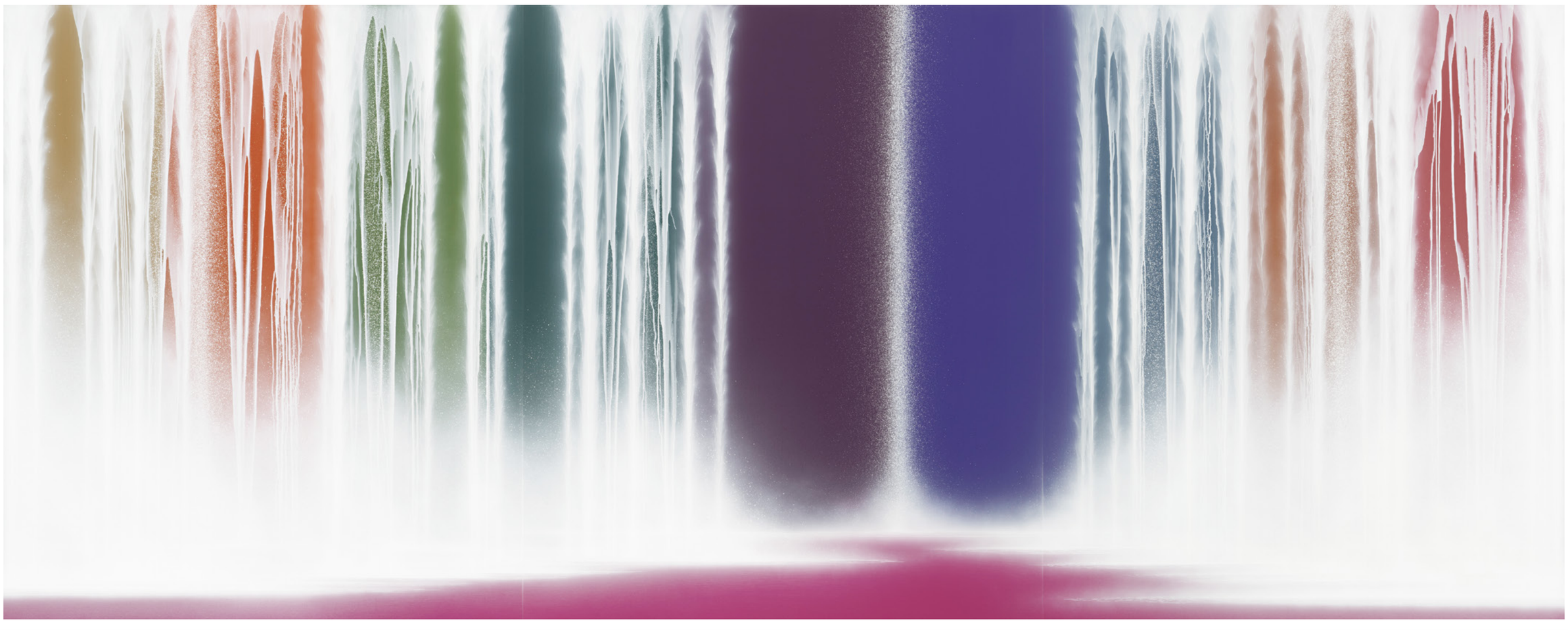
（2月4日取材・撮影／坂場和仁）

5月に奈良国立博物館で公開予定の渾身の御厨人窟最新作《遥かなる響き》（横約5m）の仕上げをする作者（2025年3月）

せんじゅ・ひろし

1958年東京都生まれ。82年東京藝術大学美術学部絵画科日本画専攻卒業、87年同大学大学院後期博士課程満期退学。95年ヴェネチア・ビエンナーレにて東洋人で初めて名誉賞を受賞。大徳寺聚光院襖絵、高野山真言宗総本山金剛峯寺大主殿襖絵、メトロポリタン美術館、國立故宮博物院、英国国立ヴィクトリア＆アルバート博物館、奈良国立博物館など世界主要美術館に収蔵・展示。現在日本芸術院会員。

「ゴギョウセツ―木火土金水―から見る千住芸術の姿」3月1日㈯～12月25日㈭ 軽井沢千住博美術館（長野県北佐久郡軽井沢町長倉815）☎0267―46―6565 ㊡火曜（ただし祝日、GW、7～9月は無休）㊐一般1500円 開9時30分～17時（入館は閉館の30分前まで）



《ウォーターフォール・オン・カラーズ》2024年
193.9×486.3㎝ 紙本彩色 奈良国立博物館蔵